

## 2023年度5月 イギリス文学シンポジウム梗概

### テーマ：戦争とシェイクスピア

ウィリアム・シェイクスピアは、その作品において、様々な戦争、戦乱を描いた。そこでは、戦争の本質、人間の在り方、そして戦争が持つ恐ろしい影響について、深く掘り下げられている。今回のシンポジウムでは、シェイクスピアが描いた戦争、戦乱について、それぞれの発表者が、多面的に考察し、横断的に議論をしていく。戦争が再び間近なものとなってしまった現在、シェイクスピアが描いた戦争、戦乱についてあらためて考えることは、たいへん意義深い機会となるだろう。今回の議論を通して、困難な時代を生きる私たちが、よりよい社会を構築していく新しい視点を得ることができれば幸いである。

### 『ヘンリー六世第三部』と戦争

亦部美希(日本大学文理学部講師)

『ヘンリー六世第三部』(*King Henry VI Part 3*, 1590-92) は、薔薇戦争(1455-85)を題材としたシェイクスピア(William Shakespeare 1564-1616)の歴史劇である。この劇は、シェイクスピア劇の中で、もっとも多く戦闘シーンが描かれているという。また、この劇には、戦場で実の父を殺した平民の息子と、戦場で実の息子を殺した平民の父が登場している。本論では、劇中で複数回提示されている「生首」のイメージ、「飛翔」のイメージ、「殺害された父を想う子供」のイメージと、「殺害された息子を想う親」のイメージを辿り、この劇において、戦争がどのように描かれているかについて、考察したい。

### 『リチャード三世』と戦争

松山博樹(日本大学法学部准教授)

『ヘンリー六世第三部』に続き、シェイクスピアは、『リチャード三世』(*Richard III*, 1592-93)において、薔薇戦争の終幕を描いた。生まれながらに身体的障害を負った主人公リチャードは、己を疎外する社会に憎悪の念を抱き、王位を篡奪し、凋落していく。そのカリスマ的悪辣ぶりは、初演以来、観客を魅了し続け、『リチャード三世』は、最も上演回数が多いシェイクスピア作品のひとつとなった。また、演劇の世界でも、この作品の主人公を演じることは、役者冥利に尽きるとされているという。長く暗い戦争の時代の最後に、社会を蹂躪しつくした狡猾で残忍な独裁者が、これだけ人気を得てきた背景には、何があるのか。また、作品において、なぜ、周囲は主人公の独裁を許し、付き従ってしまったのか。以上について考察することで、戦争の本質を垣間見る手掛かりとしたいと考えている。

## 『オセロー』と戦争

堤裕美子（佐野日本大学短期大学准教授）

『オセロー』 (*Othello*, 1601-02)は、シェイクスピアの四大悲劇の中で2番目に書かれた作品で、背景にイタリア対トルコの戦争があり、主人公オセローも英雄と評される軍人である。しかしこの作品は「家庭悲劇」と表現されることがあり、四大悲劇の中で最も政治性の少ない作品とも言われる。『オセロー』が人々を魅了し続ける大きな特徴のひとつは、誉れ高い軍人オセローが、イアーゴの数々の台詞によって最愛の妻デズデモーナの不貞を信じ込み、嫉妬と絶望に苦しんで殺害に至る経緯である。イアーゴの巧みな言葉遣い、オセローを追い込むスピードの速さ。『オセロー』に今一度向き合うことで、現代における我々と戦争について考察を行いたい。